

Story #5 広大な大地が育む「四季のドラマ」



認定 NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

嶋崎 暁啓 さん

地域とともに歩み続けたサロベツ
湿原で出会う、ダイナミックに
移り変わる「生きた自然」。

■サロベツ

湿原の誕生

一万年ほど前、サロベツ周辺は海とつながる大きな湖でした。そして、六千年以上の時を経て、日本最大の高層湿原が誕生したのです。湿原の形成にとって大事なのは「涼しい気候」。北緯四十五度付近に位置する宗谷地域は、一年の平均気温が六度程度で高山帯と同じような自然環境なので一年を通して涼しい気候だからこそ植物が枯れた後、分解されずに長い時間かけて積み重なり湿原が形成されました。

一般に高層湿原が見られるのは、本州だと高い山の上ですが、平地でこのような自然に触れることができます。それは、サロベツ湿原なら
では、珍しい高山植物が次々と花を咲かせ、野生動物を存分に楽しむことができ、「生き物」の宝庫として世界的にも重要な湿地（ラムサール条約湿地）に認められています。

■四季を

楽しむ

宗谷地域は、夏のシーズンに多くの観光客が訪れますが、ここサロベツ湿原の魅力は夏だけではありません。春には雪どけとともに、ミズバショウが早春の湿原に顔を見せます。夏を迎えると、高山帯でしか見られない貴重で美しい花々が咲き乱れます。一週間ごとに主役が入れ替わるショーのようです。秋はサロベツ湿

■野鳥たちの楽園

原にとって「実りの季節」であり「厳しい冬に備える季節」でもあります。湿原全体が黄金色に染まり、静かに冬の訪れを待ちます。どの季節も魅力的ですが、私は特に秋のサロベツのすがたが好きです。そして、冬になると辺り一面が雪で覆い尽くされ、どこまでも続く大雪原になります。冬は空気が一段と澄み、雪化粧した利尻山とともに別世界の風景が創り出されます。

また、サロベツ湿原は一年を通して野鳥たちの楽園でもあります。夏にはノビタキやシマアオジなどが繁殖のために飛来し、小鳥たちで賑わいます。春と秋は



大雪原の中をスノーシューで歩くと、辺り一面の銀世界を独り占め。



湿原に静かに眠る渡漕船は泥炭採掘当時の歴史を今に伝える。



初夏の湿原。オレンジ色の花は6月下旬から7月初旬にかけて咲く豊富町の花、エゾカンゾウ。

写真提供：認定 NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

オオヒシクイやコハクチョウ、マガンなどの渡り鳥たちの休息の場となり、冬には空の王者オオワシ、オジロワシが渡ってきます。

このように四季を通じたダイナミックな自然や生き物たちの動きが見られ、自然が創り出すドラマを強く感じるができるのが魅力です。

■ 広い空と地平線

サロベツの広い空も魅力の一つです。湿原に立ち、空を見上げてみると澄み切った青空に浮かぶ雲。日本のどこにもない雄大な景色が広がり、壮大な地球を感じるができます。夜は地平線ぎりぎりまで三百六十度満天の星空の中に、流れ星や天の川がくっきりと浮かび上がり、「天然のプラネタリウム」の世界へと引き込まれます。また、春には地平線の彼方に蜃気楼が見られ、雨の多い秋には虹

がよく顔を出します。

■ ヒトと自然の共生

このように、自然が創り出す魅力を存分に秘めているサロベツ湿原ですが、もう一つ私がお伝えしたいことがあります。それは「ヒトと自然の関わり方」です。もともと「不毛な土地」とみなされていた湿原を、いかにして人が住めるような環境にしてきたか。サロベツの開拓の歴史をひもといてみると厳しい自然を相手にしてきた人々の思いや努力が感じられます。

明治時代以降から、全国的に原野が農地へと転換されていく中、サロベツ湿原も本格的な農地開拓が進められました。また、昭和四十年代から三十年あまり、土壌改良材のための泥炭採掘が行われました。サロベツ湿原センターの片隅にひっそりとたたずむ渡漕船は当時の名残を感じることが

できます。

このように湿原は人々のために利用されてきました。一方で多くの湿原やそれを取り巻く自然が失われました。農地開拓と同じ時期に自然環境や景観の価値にも注目が集まりはじめ、昭和四十九年の「利尻礼文サロベツ国立公園」の指定によって、サロベツ湿原は開拓・開発中心から自然との共生へと転換します。そして今、ヒトと自然が向かい合い共生するために、地域の人々が中心となり、自然再生事業が行われていて、湿原は元のすがたを取り戻そうとしているのです。

開発当時、地域の中で湿原を全て開発してしまおうという声がある一方で、湿原を残そうという声もあったのです。そこで、湿原として残す場所、農地転換する場所、泥炭採掘による産業利用の場所と区分けし、当時画期的だったゾーンング（三面利用）という考え

方を取り入れたのです。全国的に開拓が進む中で、自然を守ろうとする意見があったことは、当時から地域にとってこのサロベツ湿原は大切なものだったのでしよう。地域の人々の自然への思いやりがあったからこそ、この素晴らしい湿原が残ったのです。手つかずの自然と人々との関わりの中で変貌を遂げてきた自然が混在しているのも、このサロベツ湿原の特徴です。

■ 生きた自然との出会い

歴史にも少し触れましたが、まずは足を運んでいただいて、ありのままの自然を肌で感じてください。そのうえで湿原と人々の関わりを知ってもらえれば、より深く楽しめると思っています。訪れていた日是一年のうちの一つの日。めまぐるしく移り変わる「生きた自然」との、その時々のお会いをお楽しみください。

Story #6 北オホーツクを彩る「豊かな自然」



浜頓別町産業振興課

千田 幹太さん

手つかずの自然が創り出す感動的な表情。北オホーツクには四季折々の楽しみ方がある。

■ 浜頓別の

自然の恵み

宗谷地域は、利尻・礼文やサロベツの自然景観が有名ですが、オホーツク海側にも魅力的な自然がたくさんあります。

まずは、クツチャロ湖。

国内最北のラムサール条約指定地である湖は、ハクチヨウの重要な中継地としての役割を果たしており、春と秋の渡りの季節には数千羽のコハクチヨウがこの地を訪れます。この時期にはエサやりなど、直接ハクチヨウと触れ合うことができます。運が良ければハクチヨウは求愛するときお互いが見つめ合う「ハッピーリング」も見ることができまますよ。また、最近では

国の特別天然記念物に指定されているタンチヨウも増えてきており、令和元年には、十二羽が確認され、繁殖も成功しているようです。

ベニヤ原生花園では、湿原性の花々を楽しむことができます。特に六月頃から八月にかけては百種類以上の植物が咲き乱れ、日本では道北にしか繁殖していないツメナガセキレイなどの湿原に暮らす野鳥やハマナスの実を食べに出てくるシマリス、木道で日向ぼっこしているコモチカナヘビなど、野生動物たちに出会うことができますので、朝早くから双眼鏡を片手にバードウォッチングを楽しむ方もいます。

浜頓別町のウソタン地区というところに「オオワシ

の森」があります。ここでは、十二月から二月にかけて、国の天然記念物で絶滅

危惧種であるオオワシ、オジロワシを間近で見ることができ、野鳥ファンを魅了しています。一つの木に何十羽、全体では数え切れないほどのオオワシ、オジロワシが集まるのは、宗谷ならではのと思います。オオワシの森は近隣に立ち入り禁止となっている土地が多いため、事前にHP等で観察マナーを確認いただくか水鳥観察館へお問い合わせください。

■ 四季ごとの 楽しみ方

自然の恵み豊かな浜頓別ですが、四季によって異なる



ベニヤ原生花園では 100 種類以上の花々が咲き乱れる。



豊かな自然景観をみせるクッチャロ湖。夏には湖畔でキャンプやカヌーを楽しめる。

クッチャロ湖は「ハッピーリング」の名所。白鳥たちの恋のリングを見つけると、幸せなことが起きるかも (右)

ウソタン地区の「オオワシの森」は、冬期オオワシ、オジロワシで賑わう (左)



北オホーツクの自然の表情

冬になると、クッチャロ湖は湖面が凍りつき永い眠

った楽しみ方があるんです。春には越冬を終えたハクチョウたちがクッチャロ湖で休息するすがたが見られ、夏にはベニヤ原生花園で美しい花々が咲き乱れるとともに、湿地を好む小鳥たちがすがたを見せます。また、湖上でカヌーやウインドサーフィンなどのウォータースポーツや、サイクリングなどで自然と直に触れ合うことができる季節でもあります。水鳥の気持ちになってクッチャロ湖の恵みを直接肌で感じてみてください。秋にはロシアで繁殖したハクチョウが、子どもを連れて越冬のためにクッチャロ湖に舞い降り、冬には五百羽近くのオオワシ、オジロワシが集まってきます。

ラムサール条約登録

三十周年

令和元年には、クッチャロ湖がラムサール条約に登録されました。登録された平成元年はコハクチョウの飛来数が一万羽を超え、平成七年には二万羽を超えました。現在も数千羽の白鳥

が見られますが、クッチャロ湖の白鳥を語るには「初代・白鳥おじさん」こと山内昇さんを紹介しなければなりません。浜頓別町の野鳥に関してそれはもう熱心な方で、渡り鳥保護を目的として、たった一人で給餌を始めました。

三十年が経った今、春と秋にエサを持って来てくれる地元の子どもたちを見ると、山内さんの想いが受け継がれているのを感じます。クッチャロ湖と白鳥を守り続けていくためにも、まずは足を運んでいただき、直接感じていただきたいと思います。

日本とは思えないような大自然が広がる宗谷。利尻、礼文や稚内の観光にお越しの際は、ぜひ浜頓別まで足を延ばしていただき、北オホーツクの自然を堪能してみてください。

Story #7 「砂金」をとおして繋いだ想い



ウソタン砂金共和国大統領

池田 邦雄さん

ゴールドラッシュに沸いた
まちの歴史に触れてみると、
砂金のもつ魅力に惹きつけられる。

■東洋のクロ ンダイク

明治二十九年、カナダの北西部を流れるユーコン川の支流クロンダイクで砂金が発見され、アメリカ大陸にゴールドラッシュが巻き起こりましたが、その二年後の明治三十一年に開拓が遅れていた道北の一角、枝幸町、浜頓別町、中頓別町で「枝幸砂金」が発見され、全国から砂金掘り師が夢を抱きやってきました。これが「東洋のクロンダイク」なのです。

浜頓別町を流れるウソタンナイ川の奥地でも多くの砂金が産出されました。発見当初はカッチャやユリ板など日本古来の砂金掘り道具一式に一週間分ほどの食

料を背負った密探者たちが横行しましたが、まもなく鉱区が設けられ、砂金産出が本格化し、枝幸町から砂金地へ通ずる道の開拓が進められます。

砂金地の中心は浜頓別のウソタンナイ川や中頓別のペーチャン川であったのになぜ「枝幸砂金」だったのでしょうか。それは、当時枝幸が陸路・海路の交通、経済の中心的役割を果たしていたからなんです。

■枝幸砂金と 浜頓別

昭和に入り、現在の浜頓別市街地からの道路が開通するまでは、砂金地に向かうには枝幸からのルートしかありませんでした。ウソタン砂金地の昔の地名に

「馬道の沢」という地名があります。これは、当時鉄道も道路もない時代、砂金地へは馬による輸送に頼っていたからです。

ゴールドラッシュは明治三十二年ごろから始まり、その後数年間人々に一攫千金の夢を抱かせました。当時の産出高については鉱区主すら把握することが難しかったと聞きます。特に明治三十三年にウソタンナイ川の支流で発見された金塊は七百六十八グラムほどで、我が国最大とされています。こうして人々に夢と熱気を与えたゴールドラッシュも、日露戦争などを経てやがて衰退していきます。昭和六年頃、二度目のゴールドラッシュが起こりましたが、昭和十二年頃をピーク



昭和10年頃のウソタンナイ川での砂金掘りの様子。「樋流し（といながし）」と呼ばれる伝統的な方法で金を選別する。（右）

現在のウソタンナイ川での砂金掘り体験の様子。伝統的な技法による体験は大人はもちろん子どもも楽しめる。（左）



ウソタン砂金探掘公園内には、百年記念碑や金山神社があり、当時の様子を振り返ることが出来る（左）

体験受付や売店があるゴールドハウス内部では、ウソタン砂金地の歴史が写真パネルなどで展示されている。（右）

に第二次世界大戦への突入とともに衰退します。晩年は最新鋭の機械掘りを導入して再建に入ろうとしたが、その思いもむなしく、昭和二十七年に閉山を迎えたのです。

■ 繁栄を今に伝える

砂金に沸いたまちの歴史と伝統を伝えるために、昭和六十年に「ウソタン砂金共和国」が建国され、伝統的な技法であるユリ板を使った砂金掘り体験が楽しめます。

私たち共和国のメンバーが一番大事にしていることは、地域に愛情や誇りを持つこと。地域の人々が砂金とともに歩んだ浜頓別町の歴史を振り返り、自分の住んでいる地域に自信や誇りを持って観光客の皆さんとふれあい、砂金掘りの体験とともに地域の歴史をご紹介します。想いは必ずつながるものです。実際に

全国各地から毎年多くの方に足を運んでいただいております。リピーターの方も多いです。私がお会いした方の中には、二十年前に学生だった方が、自分の子どもに砂金掘りの感動を味わってほしいと、家族を連れて再び訪れてくれた方もいました。

こうして砂金を通じた出会いを大切に、地域の歴史や文化を次の世代に語り継いでいくこと、砂金掘りの技術を後世に伝承していくことが私たちの使命だと思っています。

■ 浜頓別から全世界へ

砂金を通じた出会いは日本国内にとどまりません。世界各地で砂金掘りの世界大会があり、共和国のメンバーも参加しています。また、平成十四年には浜頓別町で開催されました。この大会では、平和な世界を願うとともに砂金を通じた出

会い、再会を目的に全世界から人が集まり交流します。

■ 砂金の持つ魅力

砂金は人間の心や欲を動かす、惹きつける魅力があります。だからこそ、ゴールドラッシュに沸いた当時、全国からたくさんの人が砂金を求めてこの地を訪れ、今も多くの観光客の方が砂金掘りを楽しみにやってきます。

砂金は人と人をつなげる力があります。これこそが、この街に暮らす私たちにとっての財産だと私は感じています。観光で訪れた皆さんも、砂金を通じた出会い、地域の歴史を感じてもらえれば、旅がより深いものになりますよ。

Story #8 「手つかず」の自然を独り占め



一般社団法人なかとんべつ観光まちづくりビューロー・そうや自然学校

北川 直樹さん 加藤 志保美さん

ゴールドラッシュとともに
生まれた中頓別町。歴史にひたり、
大自然と過ごす贅沢なひととき。

■中頓別と

砂金

かつて砂金の発見により、枝幸町や浜頓別町とともにゴールドラッシュが巻き起こった中頓別町。砂金を求めてたっくさんの人が中頓別町にやって来ました。人々を魅了し「東洋のクロンダイク」と言われた砂金はどのようなものだったのか。歴史をたどると、砂金は中頓別町が誕生したきっかけでもあったのです。

明治三十一年、枝幸町を流れるパンケナイ川の山中で豊富な砂金が発見され、その後すぐに中頓別町を流れる頓別川支流のペーチャン川でも砂金が見つかり、たっくさんの人々が中頓別町にも集まり、一時期は八千

人を超える集落が形成されました。この時期、中頓別にやって来て開拓を始めた榎原民之助（ならはらたみのすけ）という人が町民第一号で、ここから中頓別の町としての歴史が始まります。まさにゴールドラッシュの中で誕生した町なのですね。

しかし、明治三十四年には砂金はほぼ採れなくなり、中頓別のゴールドラッシュはわずか三年という短い期間で終わりを告げます。

砂金ブームは終わりましたが、その後も金の歴史は砂金から金鉱山の開発へと形を変えて大正、昭和へとつながっていきます。

現在でも毎年多くの砂金掘り師たちが訪れ、それぞれの想いを胸に砂金掘りを

楽しんでいきます。そして、観光で訪れたお客様も、一攫千金を夢見て中頓別に集まってきた砂金掘り師たちと同じように、砂金掘りの体験ができるのです。

■砂金を掘る 贅沢な体験

中頓別町の「そうや自然学校」で行っているペーチャン川での砂金掘りツアーでは、あらかじめ指定されたポイントで砂金掘りを行うのではなく、川全体がフィールドなのです。「砂金掘り師と同じような体験を味わう本気の砂金掘り！」をコンセプトに、ガイドと一緒にポイントを探すところから始め、本格的な砂金掘り体験が楽しめます。

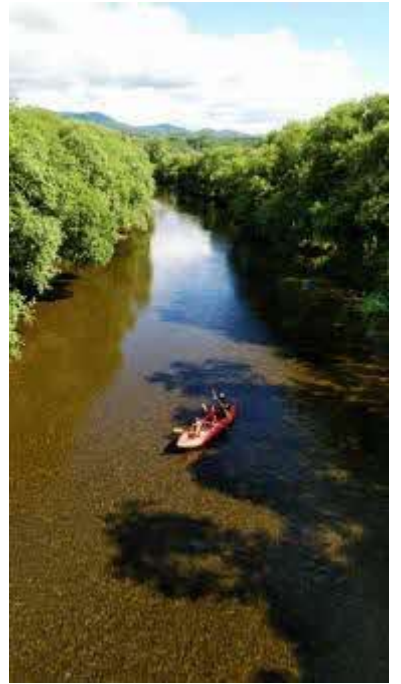
このポイント探しは実は



一攫千金を夢見てペーチャン川に集まった砂金掘り師たち
(明治30年頃)。(左)

冬の鍾乳洞を訪れると、地面からそびえ立つ
氷筈(ひょうじゅん)が顔を見せる。(中央)

頓別川をのんびりと下るカヌー体験は、
宗谷の自然を独り占め。(右)



とても面白いのです。川の形状、流れ方などによって砂金が溜まりやすいポイントを探します。地図を見ながら「ここは砂金がありそうだ」と予測して、実際にその場所に行つて確かめてみると、見事そこに砂金があるのです。見つかったときには思わず叫んでしまうほどうれしいものです。こうして、自分だけのポイントを探しながら川を下っていくのが楽しいのです。

アーを楽しめるのは、ここだけと自負しています。また、ペーチャン川はいまだに採れる砂金の量も多いので、全国を渡り歩いている砂金掘り師も「天然の砂金が採れるのはペーチャン川が一番」と声を上げています。

ぜひ、ここでしか体験できない本格的な砂金掘りを中頓別の自然とふれあいながら楽しんでいただければと思います。

■川のせせらぎを感じる

砂金掘りとともに中頓別の自然を堪能できるおすすめプログラムがカヌー体験です。緩やかに流れる頓別川はカヌーツーリングに最高で豊かな自然が残る河畔をのんびり下ると、カワセミやカモの親子、鹿やキタキツネなどの野生動物に出会うことができ、時期によっては目の前で樺太マスが遡上するすがたが見られる

かもしれません。ほぼ人工的なものがないので、自然が創り出すすがたを堪能でき、神秘的な水の世界を贅沢に独り占めできるプログラムです。

このように、頓別川ではカヌー、支流のペーチャン川では砂金掘りが楽しめ、夏は川を中心に中頓別の自然を満喫してもらえればと思います。

■手つかずの自然の魅力

冬は夏とは異なる楽しみ方があります。日本最北の鍾乳洞には、厳冬期、自分の背丈よりも大きな氷筈(ひょうじゅん)がすがたを見せ、とても神秘的です。また、静まりかえった森、澄んだ空気、雪化粧した針葉樹の中を歩くと、どこか別世界にでも来たのかと思えるような気持ちになります。

中頓別をはじめ宗谷地域は、人と自然の距離、人と



砂金掘り体験では、ガイドが秘密のポイントへご案内。
当時の砂金掘り師たちの想いを感じてみては。

人との距離がとても近いのが魅力です。手つかずの自然を楽しみ、地域の人とふれあいながら、ゆっくりとした時間を過ごしていってもらえればと思います。